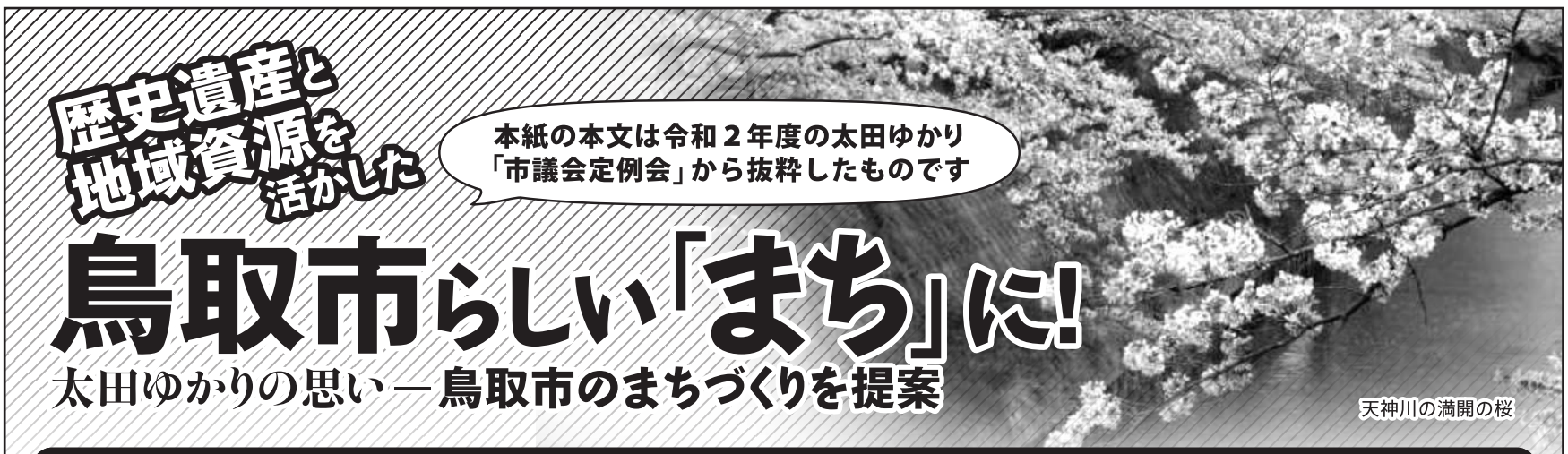
鳥取市民のための
縁がわ通信
2021 春号
鳥取市議会議員太田ゆかりによる鳥取市政レポート



天神川の満開の桜

歴史遺産と地域資源を活かした

本紙の本文は令和２年度の太田ゆかり「市議会定例会」から抜粋したものです

鳥取市らしい「まち」に!

太田ゆかりの思い－鳥取市のまちづくりを提案

地域資源の豊富な「鳥取の時代」の到来

6月議会での主要質問項目

1 .新型コロナウイルス感染症対策から見えてきたICTの活用について
2. 山陰海岸ジオパークと鳥取砂丘について
3. 地域資源・地域文化遺産を活かしたまちづくりについて

感染症対策から見えたICTの活用

新型コロナウイルスが猛威を振るい、人々の生活は一変、人の移動が制限され、リモート、オンラインという言葉をよく耳にするようになりました。大学生や新社会人も新天地に移動することもできず、ＩＣＴ（情報通信技術）を活用することにならざるを得ない状況となりました。

緊急事態宣言が解除され、少しずつ日常を取り戻し、新たな生活様式が模索される中でますます進む情報通信社会は、ＩＴと人の役割をバランスよく活用していくことが大切だと感じます。

ＩＣＴによる利便性の向上や業務の効率化、また新しい働き方なども考えられます。ＩＣＴ活用における課題の解決の可能性があるもの、あるいは発展性があるものについて伺います。

（深澤市長）学校休業へ対応したeラーニングやオンライン授業に向けた環境整備、来庁せずに手続を行うことのできる電子申請によるオンライン化、職員の感染対策としてテレワークによる在宅勤務、介護施設におけるオンライン面談等が可能な環境整備を促進する助成制度を創設など、本市のICTを積極的に活用し課題解決を図ることとしています。

ＩＣＴを安全に活用するためには、ＩＴ分野の有スキル者、特に若い人材の確保が大切です。県外者をオンラインで鳥取市や市内の企業で雇用するなど新たな雇用の形、場が生まれると思います。市職員と一緒に共同でオンラインシステムを構築し、運用もリモートで行っていくことは災害時にも有効だと考えます。

山陰海岸ジオパークと鳥取砂丘

日本最大級の鳥取砂丘は、日本海から吹き付ける季節風が作り上げ、目に見えぬ風の姿が風紋に映し出されます。鳥取市民は、四季折々の恵みを受け、それを誇りとし、訪れる人々にその富を分け、世界中の人々と友情を育んでいます。

鳥取砂丘は福部砂丘、浜坂砂丘、湖山砂丘、末恒砂丘があり、このうち福部ではらっきょう、湖山ではサツマイモの栽培が長きにわたって続けられています。

一方で、砂丘農業生産者の高齢化が進んでいます。この伝統の農業を移住希望者の方に情報提供をすることは、新たな担い手の発掘になるのではないかと考えます。鳥取砂丘には、自然景観だけでなく、暮らしの中で生まれてきた歴史や文化、農業、芸術、魅力ある地域資源があります。これらを総合的に結び付けてストーリーとして発信していくことが今後の砂丘には必要だと考えます。

（深澤市長）山陰海岸ジオパークの資源を地域の皆様と連携しながら大切に磨き上げ、それらを組み合わせて発信することで、鳥取砂丘の魅力をより一層深めてまいりたいと考えます。

砂丘地での農業

9月議会での主要質問項目

1 .大きく変化している気候ならびに気象への対応について
2 .新型コロナウイルス感染症対策から見えてきたリモート（遠隔）コミュニケーション社会に向けて
3. 地域歴史遺産・地域資源を活かしたまちづくりについて

大きく変化する気象への対応

梅雨前線の影響により、令和２年７月３日以降、九州地方をはじめ日本各地で記録的な豪雨となり、大規模な河川氾濫や土砂災害など、甚大な被害が発生しました。自然の力の脅威と頻発する災害に対して、恐ろしさを感じるほどです。

東日本大震災以来、国は堤防の脆弱性を認識し、その対策を含めて国土強靭化計画を作成しましたが、近年の急激な異常気象に対して「逃げろ、避難しろ」としか言えない無力さが露呈されました。

国は、令和３年７月に総力戦で挑む防災・減災プロジェクト～いのちとくらしを守る防災減災～として、堤防計画や指定地限定の急傾斜地対策を見直し、山林保全、かんがい用水、地下貯水まで含め、地域総体を対象に抜本的かつ総合的な防災・減災対策を講じようとしています。平成30年７月豪雨における広島での土砂崩壊は、山林を宅地に開発したことが要因といわれています。国では開発許可の許認可基準の見直しを検討しています。大規模災害を見据えた開発許可についての市長の認識を伺います。

（深澤市長）国は土砂災害特別警戒区域などのいわゆる災害レッドゾーンにおける開発規制の強化など、令和4年度からの施行を目指して開発許可制度の法令改正に着手しています。本市においても、今後国において示される政令また省令等に基づき、必要な開発許可基準の見直しを行い、自然災害から市民の皆様の被害を防ぐように、適切に対応していかなければならないと認識しています。

住宅地に土砂が流れ込んだ（平成30年7月25日・本人撮影）

鳥取市議会議員
太田ゆかり事務所
〒680-0011
鳥取市東町1丁目
Eメール info@engawa-yukari.com

ご意見、ご要望をお聞かせください。

太田ゆかり公式ホームページ
http://engawa-yukari.com
鳥取市のあり方や、具体的な政策を提言し、社会に問いかけていきます。また「議会報告」、日々思うことを発信中。ぜひご一読ください。

SNS やっています。
engawa_yukari
engawa_yukari

縁がわからひと言

疫病の歴史が教える地域の歴史文化の大切さ

人類は、紀元前の昔から様々な感染症と戦ってきました。日本書紀には、崇神天皇の時代に疫病が流行し、人口の半数が失われたことが記載されています。感染症のパンデミックは歴史を変えるほどの影響を及ぼしてきました。

感染症をもたらす病原体や対処法が分かってきたのは19世紀後半からです。その結果、感染症による死亡者は激減しました。さらに公衆衛生の意識の普及向上も図られてきました。

原因も分からず、治療も十分に確立されなかった時代は、疫病が流行した各地で鎮魂祭が行われ、薬師如来や牛頭天王を祭り、疫病退散、無病息災が祈願されるようになりました。祇園祭の始まりもそのひとつです。

このように人々の暮らしの中から文化が生まれてきました。先人の知恵や工夫を学ぶことにより、それを教訓として困難に自信を持って立ち向かうことができます。そして、このことが地域の活性化の原動力になると考えます。逆に言えば、地域資源と文化遺産をその地域の地理と歴史に基づき正しく再認識することが地域活性化の鍵となるのです。地域資源と文化遺産を生かしたまちづくりはそのような認識の上に生まれるものだと考えます。改めて、地域資源、文化遺産を生かしたまちづくりが必要と考えます。

アフターコロナというよりはウィズコロナとなる可能性が高いということがあります。そうなれば、リモート社会が進展する。ということは、東京一極集中、大都市集中の意識が薄れ、地域資源の豊かな地方に人も移動し、機能も分散され、真の地方の時代が生まれる可能性が大きくなると考えます。来る地方の時代へ向けて、今じっくりと、そしてまた人づくりを行い、地域資源という宝、本当にたくさんある宝を磨き上げていくことが大事だと思います。

座光寺所蔵「因幡薬師縁起絵巻」

旧本庁舎反対討論

旧本庁舎解体について、解体後に杭の残置は通常行われることもありますが、地下構造物の残置について問題があります。

市は当初、この構造物を撤去する予定でしたが、2月議会で「経費を軽減するためと、次に何かを建設するときに有利な財源を利用し、その際に撤去する」と説明しました。

しかし、土地利用が決定していない現在、これは妥当な選択でしょうか。新庁舎建設工事において、旧庁舎の残置物が工事全体の遅延と費用増加の要因のひとつになりました。この負債を次世代へ送ってよいはずがありません。

旧本庁舎1階市民ホールの壁画は、市民憲章5項目を5人の天使に表し、この天使が健康で明るい鳥取市に舞いおりているようすを表現したものです。また3階と6階の壁画はどちらも型を作り特別に焼き上げたもので、3センチ8センチ15センチと3種の厚さのタイルで描かれた壁画は重厚な感じで美しいものです。

3階の壁画は「民主主義に従い、市民による市民のための政治を表現し、多くの意見をまとめ企画運営されていく姿を表現しております。」、また6階壁画は「議会部門と執行部門の二つの柱による鳥取市政を表現し、今後ますますよりよい市政が、両者の合議により行われてゆく姿を、二つの大きな円により表現したもの。」と、建設当時、昭和39年10月号の市報に掲載されています。この壁画は京都市市立芸術大学間野岩夫先生の作品であり、文化財だと思います。

また、壁画部分には泰山（たいざん）タイル特製と記載があります。泰山タイルは池田泰山が大正15年京都東九条で始めた製作所で作られ、帝国ホテルや旧甲子園ホテル（現武庫川女子大学甲子園会館）、心斎橋大丸や京都先斗町歌舞練場など日本を代表する近代建築に多く用いられ、色彩豊かなタイルとして賞賛されています。

旧本庁舎は建設当時の人々の新制鳥取市への思いが込められており、それを後世伝えたいことがわかります。また地下室は薬研堀の底を利用し、多くの先人の知恵と技術も込められています。歴史的・技術的・文化的　調査を行わず、砕石と土で蓋をしようとしている解体事業を認めることはできません。

旧本庁舎３階壁画

歴史遺産・資源を活かしたまちづくり

現在の建築基準法の前身になる法律に市街地建築物法がありました。昭和18年の鳥取地震で残った建物は約20％でしたが、これらの建物はこの法に基づいて市がきめ細かく指導して建物を補強した経緯があります。また、建て直された建物には倒壊した建物の部材を切り縮めて使うなどの工夫が見られます。市民の消火活動、行政の取組、そして大工技術、鳥取地震から現在まで残っている建物は歴史・文化資源です。これをまちづくりに生かすことが大事だと思います。

（深澤市長）良好な景観を維持･保全していくには、行政だけではなくて市民の皆様との協働による景観まちづくりが重要であると考えています。今後は、この取組が各地で広がるように、SNSなどを活用して景観に関する啓発を進め、市民の皆様との協働の景観のまちづくりを進めてまいりたい。

鳥取市は、水害・地震・大火災害を経験してきており、中心市街地内に現存する防火建築帯は全国で初のものです。これは鳥取の歴史・文化資源のひとつと考えられます。フランスにおいて本市出身の漫画家・谷口ジロー氏の扱った漫画は、高く評価されており、その作品でも防火建築帯が登場してきます。地域の歴史資源を含めて、海外等へ発信できる取組を行ってはどうでしょうか。

（深澤市長）谷口ジロー氏の作品に登場する中心市街地のスポットなどを作品の場面とともに紹介をするガイドマップの製作を進め、鳥取の景観と併せて、改めて内外に発信をしていきたい。

久松山と防火建築帯を有する若桜街道は鳥取の景色

12月議会での主要質問項目

1. 日本の伝統文化・技術の継承と災害に強いまちづくりについて
2. 地域の歴史景観を活かした美しいまちづくりについて
3. 地域歴史資料に込められた地域資源を活かしたまちづくりについて

伝統技術を継承したまちづくり

木造建造物を受け継いでいくための宮大工や左官職人など、17の技術が伝統建築工匠の技として「ユネスコ無形文化遺産」に登録されることになりました。国が、古来から工夫を重ねて発展してきたわが国の伝統的な技術を国の木造建築物を後世に伝えていく上で不可欠なものと認識したことは、地域の活力向上にもつながるとも述べています。

日本の伝統木造工法は柱、はりで軸組を造り、障子やふすまによる間仕切りを主体とし、欄間を持つ素直な形状の建物で、自然災害に強く免震性に優れます。

熊本地震に見舞われた熊本県で、県庁は熊本型伝統工法を用いた「木造建築物設計指針」を作成しました。地域の伝統的技術の継承することは、今後の地域の災害対策へ活かせることに加えて、地元の教育の一環にも役立てることができると思います。歴史的木造建造物を見学し、また他都市の事例を勉強することを市全体でプロジェクトチームを作って検討・勉強してみてはどうかと考えます。

（深澤市長）日本の建築技術は日本の風土に合った、すばらしい技術であると考えております。次世代正しく継承していくことも非常に大切であり、市の各担当部署で伝統工法を認識して今後のまちづくり等に生かしていくためにも、ワーキンググループ設置を検討してみたい。

校歌の歴史的価値の再考

小中学校の校歌は地域の歴史や風景、また暮らし、様子を示す歴史的価値が高いと私は強く思います。

「樗谿の水は清く――」というのは修立小学校の校歌の歌詞です。また浜坂小学校の「砂丘の丘の上に千代川が、そして久松山の峰をはるかに望みつつ――」の歌詞は、浜坂小学校から久松山をはるかに見ていると歌詞のような風景が広がるというものです。また遷喬小学校の作曲者はかの有名な田村虎蔵です。市内にある小中学校校歌の魅力を再認識し、観光振興やまちづくりに活用してはどうか。

校歌をホームページで聞くことができれば、県外の卒業生も本当に懐かしく思い、鳥取を近くに感じていただけるはずです。また、旅行や移住の場所として鳥取市を検討するときに、事前に校歌に触れることで、地域の風土を知る大切な情報として活用できると思います。

（深澤市長）地域に根差している小･中学校の校歌は、文化芸術の面におきましても価値を有するものです。地元の音楽家などと連携いたしまして、市の公式ホームページに校歌を掲載するなど、今後、具体的な研究もしていきたい。

太田ゆかりはこう思う。

他都市では、廃校した学校に学校資料が内部管理者のいないまま保存されており、年数が経過すると、歴史資料の散逸が危惧されています。廃校になった学校の校歌について市は「不明」と答弁、地域の風土を記した校歌は保存管理が急務です。

2月議会での主要質問項目

1. 災害に強いまちづくりについて
2. ICTを活用したまちづくりについて
3. 歴史遺産を活かした魅力あるまちづくりについて

防災教育の大切さ

東日本大震災から10年になります。私は常々、災害に強いまちづくりには地域の実情に合った実行性のある訓練が必要だと思っています。

実は、こどもたちの防災意識は教育によって年々高くなっています。岩手県釜石市では、大震災時に中学生が小学生の手を引いて逃げ、近隣の大人たちがそれを追うことで皆が命拾いしました。こどもの行動が地域を救った「釜石の奇跡」といわれるものです。身近な地域単位で、こどもから大人まで一体となった防災訓練が必要だと考えます。

まちづくりと防災は一体

現在進んでいる鳥取城跡の整備をまちづくりに活かすためには、ストーリーが必要です。久松山から袋川に至る城下町形成の中で整備された景観を、まちづくりに活用していくことが必要です。

まちづくりと防災は一体のものです。まちづくりはいつの時代も、そこに住む人々が安全に暮らせるように備えなれてきました。まちの歴史を忘れないことこそが、これからの災害に強い鳥取のまちづくりに欠かせません。

東日本大震災からの復興が続く、復興を待ち望んでいる方々、そういった方の気持ちを考えたとき、私たちが安心してこの鳥取市に住み続けていることは、本当に幸せであると感じます。そのためのまちづくりを進めてまいりましょう。

（深澤市長）まちづくりと防災は一体のものであると私も思っており、過去の歴史の光を現在に当てて、現在の状況を読み解いていくことは非常に意義深く、過去の災害の教訓を今後の防災に生かすことも大切です。東日本大地震10年の節目に当たって、そのような思いで鳥取市のまちづくりをしっかりと進めていかなければならないと、改めて思います。

太田ゆかりはこう思う。

築城の基本は治山･治水です。池田光政は、薬研堀から袋川までのゆるい勾配の盛土で暴れ川･千代川からの防備を堅固にし、多様な職人･商人の暮らす、活気ある城下町を作りました。

コラム

新しい生活様式に欠かせない、非接触でのやりとりを可能とするICT（情報通信技術）について、太田ゆかりは「新たな提案」を行い検討・実現もはかられています。

太田ゆかりからの提案

ICTはあくまでも非接触のツール。人と人のコミュニケーションのためには、ICTと人がバランスよく活用することが大切！

- IT分野の有スキル者、若い人材を遠隔地から新たに雇用
- ICTの推進について個人事業主への予算、支援対策
- 初心者への使用サポート体制の整備
- Wi－Fi環境の整備提案（公共施設、各総合支所での整備）
- 風景・町並みの動画配信
- 鳥取市におけるデジタルコンテンツの保存・活用
- 体育行事や文化・芸術事業に対するリモート配信への補助金
- リテラシーの向上

総合支所のＩＣＴ環境充実により、災害発生時において本庁の機能を補完することができます。また中山間地に住む高齢者の介護手続きで、本人と遠隔地に住む家族と事業所、市職員を交えて全員がリモートで話し合うことができます。支所にＩＣＴを活用した情報ハブ機能を持たせることは、支所の市民サービス拡充につながり、行政と市民の距離が縮まると考えます。